

# 琉球大学学術リポジトリ

## [講演録] 外部有識者との懇談会：濱名篤関西国際 大学学長講演録

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学評価センター 公開日: 2010-07-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱名, 篤 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/17530">http://hdl.handle.net/20.500.12000/17530</a>

## 外部有識者との懇談会 濱名 篤 関西国際大学 学長 講演録

日時：平成 21 年 11 月 12 日 (木)

場所：琉球大学研究者交流施設・50周年記念館 多目的室

皆様こんにちは。お招き頂きまして誠に有難うございます。ご紹介いただきました濱名でございます。私はわりと毎年大体沖縄には来ております。マイかりゆしウェアはバックの方に入れたままでございまして、3着ぐらいはもっておりますので、海外に行った時、ハワイに行くとき大体、アロハではなくて、かりゆしウェアを着るようになっておりますが、今日はちょっと違うのでございますが、お許しを頂きたいと思っております。

頂きましたテーマでお話をして参りたいと思っております。学士課程教育の答申、この審議には私も1年あまり前まで、参画しておったわけですが、ご承知のように政権が変わってこの後高等教育政策がどう変わっていくのかというような不安もあろうかと思っておりますし、おとといはちょうど事業仕分けがあって、GPも戦略的大学連携支援、COEもグローバル30も全部掛かっています。このように難しい状況になっているんですが、ただ、政権によって左右される事項と、大きな高等教育の流れというのは少し分けて考えて頂ければというふうに思います。

### 1 構成

今日お話をさせていただきます、学士課程教育答申、通常はどっちかというと、学士力答申と略される、最終的には学士力答申と後世になると略されるのかなという風に思っているのですが、我々は学士課程教育がキーワードなので、学士課程教育答申と言いたかった訳なんですけれども、この中身に入ります前に、今日の構成はこういう事に

なっています。学士課程教育答申と学士力がどういう事を内容としていたのかというおさらいと、2点目は答申が大学にどういう事を求めて来たのかと、3点目はこれが一番ホットな皆さんの関心事なのですが、学習成果をどう評価するのかという事と、4番目はですね、それでは何から始めていけばいいのかということです。大体多くの場合この4番目に関心が集まり、特に執行部の先生方はそちらに行かれるという事だろうと思っております。こういう筋立てでお話をして行きたいと思っております。

### 2 学士課程教育答申と学士力

最初は答申と学士力なのですが、次お願いします。

これは実は将来像答申の内容だったのですね、平成16年の将来像答申に中央教育審議会(以下「中教審」という。)の、描く大学の機能が7つ上がったのですね、以上の中で1つ以上各大学が選択するという事になっているのでございますが、私は常々アクティブラーニング、参加型の教育を主唱しておりますので、皆様方にも所々参加いただこうと思うのですが、琉球大学はこの内のどの機能だと思われませんか、というのは簡単なのですが、その内容についてのコンセンサスが出来ていると思われる方は手を上げていただけますでしょうか。1つ以上ですから、これとこれが琉球大学の機能だというコンセンサスが学内にあると思われる方。前の方の方5名の方で、後ろの方から全く手が上がらないという事でどうも、執行部が思っている程、このことについてコンセン

サスは無いという事のございますね。大体多くの大学がこういう状況なのです。改めて言われてみればどれだろうと、そういう議論をちゃんとしてないという所があると思うのですが、これが実は、この後出て参ります、大学としての到達目標、教育目標を設定する前提になると思います。どういう機能を果たすのかという事ですから、これがフィックスされないと話は前に行かないわけですね、所がですね、非常に実は難しい。これらの項目を見ていただけるわけですが、機能自身が多様化しているわけです。関西国際大学も琉球大学も世界的研究教育拠点を目指しているかという、申し訳ないですが、そうは思にくいですね。しかし、これらの中でどれとどれなのかと言ったときに、うちの学部はこれだよとか、私にとってはこれだよな、という事皆さんお感じになるかも知れませんが、そうした議論の結果だけではなくて、そもそもこの7種類を全部機能だというのです、1種類の学位ですべての機能を包含しているわけですね。例えば、生涯学習の拠点でも学士号を与えて、世界的研究教育の拠点でも学士を与える。これが1つの現在の大学教育というのを一言で語る事の難しさなのです。さりとて世界的研究教育の拠点と社会貢献を、或いは生涯学習の拠点は両立しないというわけじゃないのです。その組み合わせをどう設定するかという事が重要であるという事です。なおかつ、これは執行部の先生方よくお分りのとおりで、現在の中教審の議論も、競争的な資金配分についても、全てどの機能をその大学が選ぶのかという機能分化を前提にしているわけです。ですから前列の方が手を上げるのは、前列の方だけが思い込んでいるのではなくて、事実、そういう方向に向けて対外的には応えざるを得なくなっているという事でもあります。次お願いします。

それですね、これは参考としてこういうのがあるのですが、大学の機能別分化の促進と大学間のネットワーク構築について、という資料がございまして、この中では色を変えています、大学での適正規模、及び個性化、特色化を通じた機能別分化の在り方、これとその為の公財政のバランスがとられるという事で、この選択がはっきりしないと、こういう所に根拠として明確に書かれて

いるわけですから難しいですね。この出典は中教審に対して、現在審議中の諮問事項の中に出てきます。こうしたことがすでに次の審議の出発点になっているという事を御理解いただければと思います。次お願いします。

学士力答申の論点を少し整理して見たいと思います。我々が召集かけられた時には、こんなにこき使われるとは思っていなかったのですが、問題は非常に難しかったのです。なぜかという、グローバル化とユニバーサル化についての基本認識からスタートするわけですが、多様化と質保証というのは逆ベクトルの事項なのです。多様化というのは、上に多様化するのではなくて、下に多様化するわけですね。質保証というの、質を一定水準以上に上げるという話しですから。実は量的な拡大と質的な充実というものを、1つの国の高等教育システムで両立させろという課題です。大変難しい課題をやることでした。それらを両立させるという認識からスタートしている答申であるという事であり、2点目はですね、これは学習評価、学位の授与ディプロマ・ポリシー、この辺を明確にして行くという事が1つの論点で、特に大卒労働者の知識、能力の変化にあった教育制度を多くの国民に提供していくと、いう事がポイントになって行きます。3つ目が俗にカリキュラム・ポリシーと言われている教育内容・教育方法という内容です。これらはあくまで学位の授与の方針に見合った形での、内容方法の改善ですので、皆さん方の意識は変わってらっしゃるかも知れませんが、ひと時代前のFDというのは各教員が努力して、教育内容や方法を改善して頂くと教育がよくなるという、仮説や論理構成になっていたのですが、それだけでは収まらないというお話なのです。その先生方の自立的、自発的な努力は多としながらも、それだけでは足りない、組織としてディプロマ・ポリシーにあった内容方法を考える、そしてそういう内容方法を実施する。さらに、どういう教育をするのかを予めアドミッション・ポリシーとして、入学を志願する人達に方針として示す、のみならず、どういう事を学習してきて貰いたい、どういう経験が必要になってくるという事を予め志願者に示すという事がポイントになります。そしてFDについては

教職員の職能開発ですから、実は3番と繋がっていると考えて頂いた方がいいと思います。それと質保証システムこれが大きな論点になっていたわけでございます。次お願いします。

それで学士力とはという事で、実は石原先生から先程、社会人基礎力とはどういう関係なのかというお話がございまして、資料を入れとけばよかったなと思いつつながら、自分の資料はありますので、ご質問があれば出していてもいいのですが、我々が審議しました時に、ここで学士力といわれているようなものに、学士力という名前が最初からあったわけではないのです。名前は最後に付けました。21世紀市民力とかいろんな候補が出たのですが、最終的なネーミングは学士力という言葉になった訳です。最初に我々がどういう所から議論したかという、学部学科であるとか、大学の難易度も関係なく、学位というもの、学士号という学位を出す為に、共通して必要になる到達目標を定め、身につけさせるべき力は何かという議論だったわけですね。どこから議論したかという、この辺がそうです。特にこの二つです。教育学部であろうが、医学部であろうが、共通して求められるものは何だというので、英語ではジェネリックスキルという言い方をします。汎用的な力、これは簡単に説明をさせていただければ、業種職種を問わず、すべての職場で大学卒業程度の人達に対して共通して、汎用的に求める力という事で、英語でいうとジェネリック・スキルです、これをコミュニケーション・スキル、数量的リテラシー、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力、というようなカテゴリーで出して行きました。この議論をはじめた時に、既に社会人基礎力は公表されておりましたし、厚生労働省はそれよりちょっと目線の低い就職基礎力というものを公表しています。就職基礎力や社会人基礎力はあるのに、何故これを作るのか、本来はこれは文科省の仕事なのです。中教審が先にやってなきやいけないのに、他省庁に先にやられてしまっ、後追いするのですけれども、我々の議論のポイントの中で、意識した事は、我々は産業界にだけに人を送り出すわけではないということです。社会に送り出していくのであり、それが教育界であったり、研究者であったり、様々な領域に送り出す事があるか

ら、産業界だけに、おもねらない形で、考えているという事で汎用的なスキルについて議論したわけです。そしてもう1つの領域は英語ではパーソナルアトリビュートと言うのですが、これも態度・志向性です。自己管理、チームワーク・リーダーシップ、倫理性、市民としての社会的責任、生涯学習力などです。こういう所までは比較的、議論は順調にいったと言ってもいいと思います。但し、このようなものだけでいいのかという議論は当然あります。大学というのはこういう事だけを習得させるわけではないという議論は当然出まして、但しこの答申の中にはですね、教養という言葉は殆んど出て参りません。全体を通して多分2箇所位しかないと思うのです。それも実質的な審議ではなくて過去の答申のリファレンスの中で、教養という言葉は出てきていますが、学士力答申の中では教養の説明は一切していません。何故かという、学士課程教育全体の議論ですから、このことは学士課程教育をどういう文脈で捕らえるか、これ自体に関わる大きな問題なのです。つまり、大学院の教育と、学士課程教育という対比で考えるのか、教養教育と専門教育というのを合わせて学士課程教育というように捉えるのか、その捉え方によって違いがあるわけですが、はっきりしておりますのは、学部教育という専門学のこと、教養教育は除外するという考え方ではなくて、4年間の学士号を到達目標とする教育を学士課程教育と総称するという所が、この答申の中でのコンセンサスでございます。これは教養教育の問題なのか、専門教育の問題なのかという議論は少し置いて頂く必要があると思います。その中で2つの柱が出て参りまして、それ以外に教養的な側面は一切目標に入れないのかという、従来教養教育で担われていたような要素を1つにまとめるとこうなるのです。知識理解、他文化異文化に関する知識の理解、人類の文化社会、自然、人文社会、自然科学ですから、こういう用語でまとめております。よく産業界の方々と議論していると、批判的思考力、クリティカルシンキングというのがあります。これが日本では非常に誤解されて受け取られている、批判的思考力と使っている大学の教員が、批判的思考力を分かっていないというケースが大部分ですね。批判的

思考力というのは、人が書いた事とか喋った事をけなす事が批判的思考力ではないのです。ロジカルに物事を考えて行くという側面がありますし、批判的思考力とは大学教育だけで獲得するのは不可能だというのが、この審議会での主要メンバー、特に我々はワーキンググループの専門委員として参加したわけですが、そこでの議論では大学教育だけで全て達成する事は出来ないという声が強かったです。というのはアメリカ辺りでは批判的思考力は初中等教育からずっと培ってきたものの結果として、身に付いているのであって、アメリカのアンダーグラジェイト教育だけで、批判的思考力を教育しているわけではないと、いう事もありました。その代わりに総合的な学習経験というものを加えました。創造的な思考力という事で、それまで獲得してきた知識、技能、態度等を総合的に活用して使えるという文脈に置き換えたわけでございます。これが学士力という、参考指針です。これをどうデフォルトにしてそれぞれの大学が、共通する目標にしていくのか。想定しているのは、各大学が、共通して最低限の到達目標を設定する際の参考という事ですので、他の就職基礎力を参考にされてもいいですし、社会人基礎力もありますし、OECDのコンピテンシーというものもありますので、参考にさせていただくものはすでに4種類はあるのです。到達目標をどう設定するか後程、お話をさせていただきますが、決して材料が無いわけではないのです。すでに材料としてはかなりあるという事、ちなみに私今、経産省が社会人基礎力の後、何をやろうとしているかという、グローバル人材基礎力を検討している。琉球大学の先程中期目標を拝見すると、関心はおありだと思いますが、そういう議論を今月から始めております。半年の間に4回、産業界から6人、大学関係者が6人、委員となってやり始めているのですね。グローバル人材とは何かという議論を今はやっておりますし、それを大学教育でどう育成するか、という話をし始めております。私はそんな何とか力を作ればいいというのではないと言っているのです。大学だけで完結しないというのが1つ、もう1つは、すでにこの学士力というのは、グローバル人材にとっても必要な要素な訳です。グローバル人材とは何かというと、

産業界は単に語学力ではないというわけです。それではどういうことが必要かという、よその国の人間ときちんと議論して、説得してやりこめるくらいの力が無いと駄目だという。それをみんなに求めるのでしょうか。そういうふうを考えていくと、何とか力と屋上屋を重ねるようなことを言ってもしょうがないと思うのです、さきほどの4つの力やコンピテンシーのどれを参考にしても大学は目標を作れるというように私は思うわけです。それでは学士課程教育の目標は何かというと、学士力プラス専門基礎能力ということになるでしょう。学士力とはどういうものかということ、これは間違えないで頂きたいのですが、学士力は教養教育ですべて修得するものではないのです。4年間通して育成していかなきゃいけないので、専門の教員だから、学部はそんな事はどうでもいいのだと思わないで下さい。こういうジェネリックな能力は、アカデミックな学習の中で育成されていきます。かつて日本の大学ほとんど、皆そろって間違った責任転嫁をしたことがあるのです。コミュニケーション・スキル、或は情報リテラシー、が一番の例かもしれません。ITが大学教育に入ってきた時に殆どどの大学は何をやったかということ、非常勤講師を雇う、若い講師を雇う、あなたたちが情報リテラシーを教えるのだという、偉い先生方は教えなかった。1年生の時はコンピュータの使い方を教える授業がある、ところが2年、3年、4年の授業ではほとんど使わないから何時まで経っても使いこなせない。という状態が長らく続いたわけですね。本当はそうじゃないですよ。全ての教育を通してこうした能力を伸ばしていく、というのが効果的であります。この学士力も4年の教育を通じて伸ばしていくということが必要なわけです。そしてもう1つは専門基礎でこれは、日本学術会議に諮問して、この11月23日に学術会議シンポジウムに大体のまとめを公表するという形になっております。次お願いします。両方をやっていくことが必要ですね。

学士力イコール、ジェネリックスキルの獲得なのですが、中身は私共の用語で言えば、ジェネリックスキルですが、誰もが獲得可能性を持つ、私はこの審議会の審議の中で、こういう例えをして、一部の委員には、大変響感をいただきました。分

かり易いのだけれど抵抗があると言われたことがあるのですが、私はジェネリックスキルの獲得というのは、自転車に乗れるようになることに近いと思うのです。大学という場での自転車が乗りこなせるようになるという事に近い、という言い方をしたのです。どういう事かという、一部の人間が出来るようになるという、理想の目標じゃないですね。自転車というのは殆んどの人が乗れますよね、乗れない間は どうして乗れるのだろうと思うのだけど、乗れるようになると、どうして乗れるのかの説明も出来ないがちゃんと乗れるという事ですね。ジェネリックスキルというのは殆んどそういう事なのです。特定の限られた人間しか出来ないのではなくて、皆が出来るようになる、素地があるからジェネリックなのです。汎用的なのです。しかしそれは単独で習得することは難しく、ディプリンの教育を通じて獲得されるものなので、例えばコミュニケーション能力という例を挙げましょう。先生方の授業の中で、授業中にグループディスカッションさせて、その結果を発表させている授業をやっている方、手を挙げていただけますか。先生方の授業の中では多分その、コミュニケーション能力というのを育成しておられる。具体的にそれを育成しようと思っていられるかどうかは別ですけれども、もし育成しようということが目的であるという事を言って、その授業の中で、その為に話し合いをするのだという事をあらかじめ説明してやれば学生自身も意識をして学び、そうした力は伸びていきます。今日の方が琉球大学の全体の縮図であるとするならば、琉球大学はそういう素地がもうすでに整っているという事になる。しかしながら、ジェネリックスキルはカリキュラムに不可欠なものとして効果的に獲得されるのですが、後知恵では駄目なのです。後知恵とはどういう事かという、君達、ディスカッションやって、コミュニケーション能力伸びたでしょと、後で言っても、それではほとんど意味がない。我々はこの授業の中で君達のコミュニケーション能力を伸ばしたいから、そのための要素を授業の中に入れます。だから、単に自分の意見を言うっていう事じゃなくて、相手に理解してもらうように表現に気を付けて話し合いをして下さいと

いうと、違うのです。後付けじゃあ駄目だというのはこういうことです。我々社会学で言うと、キャリアオーバー効果という用語があります。社会調査では事前の情報提供で刷り込みや誘導はやってはいけない、データを取る時に誘導してはいけない、という事です。しかしこれは誘導なのです。教育効果を上げるという事はある意味で目標に対して学生達に、その方向を十分認識させた上で学習させると、いう方法だと考えていただければと思います。ジェネリックスキルというのは大学教育全般を通じて獲得されるべきもので、専攻分野に関わらず、大卒の能力を保証するものだというの一般的な言われている、このジェネリックスキルを取り込んできたわけでございます。次お願いします。

この答申で非常に大きかったのはアウトカム重視なことですね。アウトカムとアウトプットとはまた違うのです。アウトプットとは資格免許を取りましたとか、何単位取りましたとか、どういう所に就職しましたとかがアウトプットなのです。何かやればアウトプット必ず出てきますが、アウトカムという形になりますと、何々が出来るようになるという、そういう状態をアウトカムという言葉で表現しています。学士力は先程来申し上げていますように、唯一の到達目標ではないのですけれども、大きなこの答申の中に込められているメッセージは、何処で学ぶか、例えば、何々大学何々学部、琉球大学医学部で学んだ事であるとか、医学を学んだという事が大事なのではなくて、その教育を受けて何が出来るようになったのかという事なのです。だから到達目標はどう設定すべきか、我々の議論の中でずっと、お分かりいただけない委員の先生方にご説明したのは、I can 何々というフレーズで目標設定していただく事が重要な事です。I can で分かるものでないと、目標としては学生達と教員であるとか、社会と共有出来ない。つまり、人格の陶冶、これは禅問答になっちゃうわけです。その人間が人格を陶冶されているかどうか、禅問答ですよ。そう簡単には分かりませんよね。そういう事じゃないのです。何が出来るようになったのかといった時にはですね、例えば、先生方、大学教育の成果というのは何処の段階で発揮されるようにな

と思っておられますか。例えば卒業の時点で明確でなければいけないのか、3年後なのか、5年後なのか、10年以上経たないと分からないのか、どう思われますか。卒業時で分かるべきものだと思っただけの方手を上げて貰えますか。はい、2人。3年位だと思っただけの方、6人。5年、いない、1人。10年、10年は分からない、9人。これが一番多数派なのですが、どうやらおわかりのように、卒業時にはっきりさせろというのが、今の大きな流れなのですね。卒業時に完成品じゃないのかも分からないのだけでも、卒業時にある程度入学時からどれだけ伸びたか、或は、自分達が設定した目標が到達出来ているかどうかという事をきちっとやりなさい、という話ですね。事業仕分けで文科省も今頃苦しんでいると思うのですが、日本には評価文化が定着していませんので、妙な数値化すると、入試の偏差値みたいなことになりかねません。何の意味もないかも分からない、ただの数字の0.1の差に意味があるかのような会話が成り立ってしまうかも分からない。そういう数字に表せない場合には自分達が出来たようになったという証明は殆んどやって来なかったわけです。この国では、努力していることを多とすることがありますが、今回は卒業までに身に付けることを明確化して、実現できる教育をどのように編成、提供するか、そして、学生がどれだけそれらを身につけられたかの証明が求められるようになってきているといえるでしょう。それらが整合的なシステムになっているかどうかの証明も求められる。認証評価が琉球大学は来年と伺いましたが、次期の認証評価ではこうした側面をどんどん強調していくでしょう。こういう仕組みがちゃんと出来ているのかという事が問われます、次お願いします。

### 3 学士課程答申が大学に求めること

それで答申が大学に求める事にいきます。5つのことなのですね。先程のテーマと近いのですけれども、到達目標の明確化、これは平成18年の4月に学則或はそれに準じる規定で規定するという事で、検証・評価可能なアカンタビリティを持った到達目標を作ってください、という形になっ

ております。琉球大学のはまだ私は確認しておりませんので、知らずにしゃべるのが一番幸せかも分かりません。GP等々で審査をやっていますと、かなりそういう評価で進んでいると言われている大学は、全学のみならず学科単位で具体的に書いてあります。但し我々の眼から見て、足並みが揃ってない、後程出てきます、教育力で言うと、恐らく日本の大学で一番評価が高い、偏差値は高くないけどという大学はあります。どこかお分かりかと思いますが。その大学の到達目標を見ると、まだ、バラ付きはあるのですが、その水準まで大体具体化しています。考えてみれば、全学の目標とうちの学部は違うと皆さん思われるでしょう。うちは医学部だから他学部とは違う。うちは教育学部とは違う。或は学科によって、隣の学科とうちとは全然違う、と先生方思われるとするならば学科の目標を作らなければいけない。2番目は体系的・組織的な教育課程の編成という事で、キャリア教育を取り込みなさい、初年次教育は学士課程教育の一部である、外国語コミュニケーション、ICT、等を取り入れるということです。リメディアル教育は大学の責任だけでも卒業要件124単位に含まれる単位は出してはいけないといった内容が出ているわけですね。考えてみれば、リメディアルの教育内容は高等教育ではないので単位はダメだという一方で、入学させた責任は真つ当せよという事ですね。

単位の実質化は先程承りましたように各大学が苦しんでおられまして、15週プラス1週、私実はこの時そんなにそこでもめた記憶はないのです。又、15週プラス1週が模範解答だとは私思っておりません。個人的には。なぜかという、アメリカの大学の例をみれば、最終週に定期試験をやるっていうのは、かなり古典的な在り方なのです。私共の大学ではどんな科目でも最終試験のウエイトは50%以下です。アメリカ式のクイズというテスト形式で平常試験をやりますと、平常試験を授業中にやるわけですね。定期試験だけを特別視しなければならないのでしょうか。アメリカの大学で見ていると、クイズが終わったら学生は帰ってしまうのです。終わった学生から順にです。15週プラス1週という、プラス1週がどれだけ意味があるのかについては、個人的には抵抗

はあるのですが、ただその事すごく言われていますし、教室外の学習はちゃんと担保されているのかと、というような事も言われておりますし、単位の実質化が強調されています。シラバスの中にちゃんと学習すべき課題とかは明記されているのかとか、それとキャップ制ですね、履修単位上限。最近行きました某大学は大学院で、夜間まで科目を取りに行くと、修士半年で50単位取ったという学生がいました。その大学の執行部に半期でどの程度の単位数が習得可能か聞いたら、20単位内ですかって答えられました。このように執行部が全く把握出来ないような事だつて起こり得る。それが認証評価の現地調査の場面などで、優等生の学生を集めてヒヤリングした際にわかったりします。そういう学生に限って真面目であるがためにそういう履修をしているのでしょうか。教育方法とすれば、一言で言えば、ティーチングからラーニング、双方向性を確保しなさい。体験を重視してFD、SDを重視するようにして行きなさい。質保証については、テスト結果での測定なのか基準を設けて達成度を測るのか、GPAなのか、実はこれらの組み合わせによって、実現して行くという事になります。次お願いします。

目標をどう設定すればいいのか、目標はすでに設定されていますよね。琉球大学この点についてはあまり問題はないという場合はスキップいたしますが、いかがでしょうか。

(いや、問題ですね。)

問題ですか。じゃあ少し申し上げます。参考にさせていただきたいのは全学の目標、先程も言いました、専攻のものは、私共の大学は2006年の3月にKUIS学習ベンチマークというのを作ったのです。その当時は社会人基礎力すら出る前に着手していますので、世界中の大学の到達目標とかを検索して、そういう目標を自分達にどう取り入れ、置き換えるかということに苦労しました。大変な努力が必要で、当時の学科長達は半泣き状態でした。何度も私学長から駄目だしが出て原案が戻ってくるわけですから、当時はそんな事をやっておりましたのですけれども、今はもうリファレンスするものがあるのです。ムダな苦労はしなくていい。しかしながらそれに加えて、社会人基礎力でも学士力でもいいのですが、それに何がス

パイスとして変わってくるのか、日本中の大学が学士力と同じ目標を達成しても、これは意味がないですね。建学理念やこれまでそれぞれの大学が抽象的にでも掲げてこられた教育目標は大きなスパイスの資源になります。更に大学教育にまずふさわしいジェネリックなアウトカムはどの位の所に設定するのも重要です。その大学流の自転車の乗り方と言ってもいいですね、高度な一輪車に乗れないと、琉球大学で自転車に乗れるとは認めない、それでもいいはず。どこまでがジェネリックなのか、80%90%の学生が達成出来る目標にしなければいけない。なおかつ外から見てさすが大学だというレベルを設定するわけですね。ここまでが全学共通として考えるならば、それに加えて設置学部学科の、専門分野の卒業生に求められるスペシフィックな能力やスキル、態度特性、こういうものをONしていただく、これらが材料です。どういう風にしてやればいいのか、トップダウンでやる方法もあります。ボトムアップでやる方法もある、それについてはお好きなようにやって下さい。但し原案づくりはやはりプロジェクトやタスクホースで会議を行い原案を作ってやって行かないと、自然には出来ません。いずれ、学内で継続的な検討をおやりにならないと、ある日突然、決まるものでもありませんし、どっかいい所のものを持って来て少しだけ直すというやり方は、禍根を残すと思います。一行一行に思い入れを持っていただく必要があると思います。しかし、重要なのは決定された目標は、学内外へと告知・浸透させるという事なのです。ウェブに書いてあります。それだけでは駄目なのです。繰り返し取り上げて定着させなければいけないし、リマインドしてもらわなければいけない。くり返し忘れないように、先生方にも学生にも社会に対してもそれをくり返し言っていないといけない。先程も言いましたように後付けの解釈ではうまくいかないという事があります。次お願いします。

体系的な目標設定したとしたら、次にどういう風にして教育課程編成するのかと、キーワードで最近良く言われていますのが、カリキュラム・マップというものを作っていくという事なのですね。カリキュラム・マップの一番初歩的な作り方



ってというのは、今あるカリキュラムを順番に並べ整理していくという方式です。アメリカの大学はよく科目番号が履修の順番を示しているというのですね。初年次教育の科目はユニバーシティ101という科目番号だと一般的に言われます。1年生の1番目を取る科目だから101、初年次教育の科目名は、フレッシュマンセミナー或はファーストイヤーセミナーという言い方をします。2年生科目だと201から始まるというふうになるのですが、そういう科目の履修の順番、体系性に基づいて番号を振るなり、図示していくというのが基本なのですけれど、それは初歩の初歩です。但しそれをまずやらないといけない、最終的には並べるだけじゃなくて、到達目標は、先程学部なり学科が定められた目標があり、何々できる状態だとするならば、そのマッピングの途中で1年終了段階、2年終了段階、必修の中では最低限どういう事を出来るようにするのだという事を、設計していかなきゃいけない、そういう観点での内容と方法の選択なのです。普通、大学改革というと、国立大学の通り相場はこんな事怒られますけど、組織を弄りたがる、新しい部局を作りたがる、科目の名前を変えたがる、名前を変えるのに中身はあまり変らないとかですね、自分のテリトリーの科目は減らさないとかのために、バトルを繰り返す事が、過去の大学改革の中で行われてきた事です。問題なのは何故そういう事が起こったかということで、それは判断基準がないからです。何を基準にするのか。この科目は必要だ、この科目は本学にとって重要であるという先生方の声の大きさに決まっていたのが、到達目標に対してこの科目が重要かとか、流れの中で必要か、或いは重複はないかという方式になっていくと、少し今までの作業が変わってくるだろうという事です。そのポリシーの中で盛り込まれるものは、必修なのか選択なのか、学年や開講時期を決めていくことも大事です。例えば、私共の大学でも過去ありました。担当する先生の負担の関係で開講時期をずらすとする。学年がずれるという事はどういう事かということ、これは自らカリキュラムの体系性を否定しているようなものですね。キャリア教育や初年次教育もその中のマッピングの中に盛り込まなければいけま

せん。リメディアル教育については先程申し上げた通りです。重要になってくるタイプがシラバスとルーブリックという事です。シラバスってというのは、琉球大学は15回の内容を書くような書式を定めておられるのですよね。全科目そうってます？大丈夫ですか。私が最近行った所はそうじゃなかったの。そのシラバスの中に何が書いてあるか、目的だけじゃなくて、評価に関するものとか、どれだけの情報がこのシラバスに含まれているかということが、非常に重要になりますし、ルーブリックって何か、ルーブリックって分からない方、はい、分かりました。評価の観点を具体的に示した、評価観点表という風に考えていただけませんか。後程それに近いものを見ていただきます。つまり学生から見れば、この科目は何が出来るようになったら、何点取れるかという事が大体分かる表なのです。これには私も最初の頃は抵抗がありました。これが出来るようになるという事は試験問題を予め、チラチラ見せているような気になるが、そうではないですね。到達目標から考えれば、その到達目標というのは、カリキュラム全体の中にあると同時に、そのマッピングした先生方お一人お一人のその科目の中には、その科目の到達目標がブレイクダウンされますから、その到達目標が出来ている状態というのは、これとこれが分かっているとか、これとこれが説明できるというように表現できるはず。そういうものがルーブリックだと考えていいと思います。シラバスが学習の手引きで、ルーブリックは学習カーナビのナビゲーション地図だと考えていただいたらいいと思います。次はどちらに行けば正しいのかを示してくれるといった具合です。こういう仕組みをどれだけ取り入れていくかという事で、教育課程の編成がうまく行くかどうかが見えてきます。ここまでが改革の方向性に含まれてくると考えてください。学習目標、評価方法、評価基準、達成レベルの目安、具体的な行程、これがシラバスとルーブリックに情報として入っているかどうかという事が、次の段階で、評価の問題として問われる状態にあります。出来てない大学が殆どですので、今の段階で出来てない事は別に、何もショックを受けられる必要はありません。出来ている大学は殆どありません。

まだまだです。次に行きます。

それで、教育課程の構築のステップなのですが、私なりに考えてみたのですが、先ずどういう風にやればいいのか、どんな事が出来る人を育てるのかを、学科専攻コースのプログラムをどうのを作りたいのかを、先ず先生方が1回きちんと議論される事が先ず必要です。ご自分の学科を改めて考えてみていただくと、それを現状の自己評価であったりするわけですが、それに全学の教育目標、学内外の資源を分析していただきたいと思います。我々からみるとこのような立派な同窓会館、50周年で建ててもらって羨ましいなと思います。宿泊も学習も出来るのかなと思うのですが、そういう資源がある、それと市場を分析すること、つまり、社会或いは沖縄県の労働市場がどうの人材を求めているのか、どういう事が出来る人を必要としているのかという事が重要になってくる。それをコンセプトにして戦略を策定して下さい。例えばスポーツイベント企画が立てられるという人間が、沖縄ではこれが必要になるという事を考えるのだったら、目標の中にスパイスを効かせていくという事も必要になってくると思います。どのような知識、スキルがあればそうした人材になるのかという戦略を策定すると、次に構造の検討を始めなければいけない。3点目は構造を考えてくと、構造の基礎を確定しなきゃいけないので、どのようなディシプリンが基礎になるかと、それで専門基礎の必修はなにを置くべきなのかと、決まっていくのだらうと思います。その次には3を基礎にどのような順序、時期にどのような比重で、どのような知識スキルを学ばせるのかというのです。建築で言えば、全体の設計作業にやっとなんか入れるということでしょう。次お願いします。

次に、どのような内容の括りとして科目を編成するのか、つまり、科目のネーミングを先に決めるのではないですね、コンテンツとしてこういう内容を入れればいけないというのを、科目に括り直したらという作業をしないと、既存科目間の領地争いになるのです。これはもう皆さんがそれぞれ自分のディシプリンに対するこだわりがあるのは、自然な事ですから、それを否定しても始まらないので、そこから始めるのではなくてキーワードから、先ず作っていくという事になる

と思うのですね。そうすると科目の単位数、授業形態、到達目標をセットで議論する、これは工法決定だという風に考えていただければと思います。到達目標の為に有効な教材や教育方法を決める、建築の方向性を決めたら、次に素材を選ばなければいけない、という事になります。素材は全ての工法に合う素材があるとは限らないので、グループワークが非常に向いているものとあれば、或いは人前で発表させるのがいいものと、書かせた方がいいものと、やはりあるわけですね。そして科目ごとに全学到達目標の何が達成できるかをもう一度ブレークダウンしてみようと、その上でシラバスの案を作成しますと、後程金沢工大のものをみていただきます。参考になると思います。その中には学習教育の目標、キーワード、授業概要、学生の達成目標、評価指標、評価の割合×評価方法、これは、建築で言えば詳細設計図であり、工程表の作成をする、という事をしていかなければいけない。それで最終的に学科内で調整して、お互いに漏れているところはないか、或いは重複は無いか、という事を確認して新プログラムは完成する、施工が決定して、教務委員会からどういう形のプロセスになるのかは、大学によって違いますが、最終的には教授会でこのカリキュラムで行きましょうというようになる。私なりの整理でいえば10段階のステップを踏めば、カリキュラムは大体新しいものに、刷新する事ができる。従来のどの科目を減らして、どの科目を増やそうかと言う議論ではなくて、かなりやり方としては従来と違うものになると思います。次お願いします。

構造化の中核としてのゼミと卒論、卒研、何が出来るようになるかという事については、ベンチマークと書いたのは全学共通目標ですね。それと専門基礎をセットにして、恐らくそれぞれの学部や学科が、目標設定されると思うのですが、学年ごとに到達目標設定してみる、ベンチマークをチェックする、という事をしないと、これは私共の大学でも最近そういう反省をしています。後ほどちょっとデータを見ていただきますが、卒論で知識と経験の総合化しようというのは、日本の大学の伝統的な手法です。特に質保証で弱いと目されている人文社会科学系及び理学では質保証を支

えていると考えられている。関係の先生方は気付かれるかも知れませんが、学部長調査データからみるとそう考えられているのですね。それらの分野はそこで到達度を見ようとしているのですが、学年ごとに見ておかないで本当に一挙に到達出来るのか。問題発見、解決、それと知識の定着、運用というのをきちんと学年ごとにチェックしていかないと、なかなか全体の学習システムがうまく機能しなくなる。到達度をどうチェックするのかといった場合に、基本は知識の定着度と、知識の運用能力を確認していく事になると思うのですが、現状では卒論、卒研での総合化をはかっていくという点から考えれば、実はゼミ教育が重要で、知識と経験の総合化の舞台として、個々の講義以外のどこでやるのかといえば、アプローチは二つしかないのです。1つはこの方法です。もう1つは後程申し上げます。次お願いします

それでは単位の実質化という事を考えていきますと、どんな事が必要になってくるかという、具体的な行程としてここに書いているような事を全部入れなければいけない。キャップ制の上限の見直し、1単位の45時間のうち、実質化をしていかなければいけない。15週確保していかなければいけない、これは皆様方もある程度お分かりだと思いますので、次に行きたいと思います。

教育方法の改善ですが、4年間を見通した教育目標の達成の為の方法としては、具体的にはこんな事です。グループワークの取り入れ、学生参加型の授業、今日は時間があまり無いので申し上げますが、色んな方法があるのですね、私がFDとか、講演でお招き頂いても、どんなに長くても90分、2時間喋る事もたまにはありますけれど、皆様方とこうしてやっているときに、時間を沢山頂くとワークをやりませう。ワークが出来なかったときにどうするか、質問に手をあげて頂くというのも、これでも皆様方は多少でも能動的に参加されていると言えると思います。ですから、受身的な教育というのは、先生がひたすら喋り続けて、学生達はただ聞いているだけということです。意思を表明してもらおうとか、或いは立って読んでもらおうとか、色んな方法は実はあるわけで、参加型の授業形態というのは多かれ少なかれ盛り込む事が出来ます。それと大学ごとに非常に有意差が

あるのは、フィードバックをきちんとやっているかどうかです。レポートをコメントつけて返していく、別に添削で真赤にしなくてもいいのです。むしろエンカレッジすることが重要といえます。実はループリックができると、コメントが返しやすくなるのです。それと教室外での学習も重要です。インターンシップ、フィールドスタディ、サービスマーケティング、我々から見ると、沖縄はこうした教育活動の場の宝庫ですね。このフィールドの宝庫を利用して、単に教室外の学習をさせるだけではなくて、活動と教室内の授業とどう繋げるかということがポイントになります。そのつながりがないと活動が生きてこない。社会人基礎力のコンテストを経産省がやっていますが、色々なプログラムが採択されたのですが、結論的にみれば、最初にやった科目単独のプログラムだけではうまくいかなかったのです。何故かといいますと、熱心な先生がある授業の中だけでやっていますから、その時は学生は感動するのです。その時は充実感もあるのです。しかし普通の授業に戻ったら、元の木阿弥になりがちなのです。そういう事を考えていくと、1つの教育プログラムでいいものがあれば、それで全体がうまくいくとは考えていません。1つの授業科目だけではうまく行きませう。点ではなくて線。線から面という風な発想で教育を設計できるかという事になります。次お願いします。

それで学生をどうアクティブラーナーに育てていくのかという事で、これはものすごく重要な事だと思うのですね。先ず最初に学生達に到達目標と評価基準を示して行かないと、学生はその気になってはくれませう。琉球大学の学生はそうではないかもしれませんが、一般的には学生達は、これが目標で、こういう事をやったら、優が取れる、グレードの4が取れるという基準を示してやらないとやる気になりませうね。もう1つは、2番目、教員が自分の科目の目標を自覚し続けることです。例えば先生方の中で、授業の最初に、今日の授業のねらいを、毎回とは言いませんが、心がけて注意してから授業をやってらっしゃる方、いらっしゃいますか。これはすばらしいですね。これだけ大事な事ですね。やってらっしゃる方、効果あると思われる方、かなりありますね、それ

はですね学生にも自分にも言い聞かせているのですね。学生に言っているだけじゃなく、そのことで自分自身も意識せざるを得ない。3点目は、他の教員と連携、協同による目標達成、例えば私共が今年採択して頂いたGPは、科目のクラスター化というテーマで貰っているのです。何をやらうとしたかということですね、先生方、学生が今、平均何科目ぐらい並行して取っているか、お分かりな方。ご自分が教えていらっしゃる学科で、平均何科目ぐらい教えます。取っているでしょう。はい、石原先生。

(キャップがありますので、10科目)

10科目位取っているということですね。10科目というのが適量だと思われる方。10科目は少な過ぎるもつと取らしてもいいじゃないかと、10科目は多過ぎると思われる方。少数意見なのですけど。じゃあ、少な過ぎると思われる方、理由はなにか、なんかありますか、根拠。どなたかご意見のある方。私は思うのですが、5教科7科目であった高校教育でも、3割しか内容についてこれていないのです。高校の学習でそうなのに、どうして10科目になって、大学教育でうまくいくのでしょうか。実はアメリカのインディアナ大学から来た私の友人が、東大のシンポジウムで話をしていたのですが、彼は、日本の10科目以上を取っている大学の現状を聞いて驚いたわけですね。アメリカは高校教育のレベルが低い状態だから、大学に入ったら、もっと知識を深めさせなければいけないというので、1 Semesterに4科目か、精々取ったって5科目しかとらさないのに比べ、日本の高校教育はアメリカよりうまくいっているのに、大学では週1回しか授業をやっていない科目を10科目もとらせて集中して学習できなくしている。なぜ大学に行ったらそのように、馬鹿げた事をやっているのかと言われたのです。私に取ってはものすごく大きなことを指摘されたとショックを受けました。考えて見れば、評価の仕方は以前より多元化してきていますね。中間レポートを出し、期末にもレポートも出します。教員が自分の科目の事しか考えていなかったら、学生は同時に10本のレポートを同じ時期に書かなければいけない。実際、誰も考えていない。すると、学生たちはその時だけ勉強したような、錯覚

に陥るわけです。だからこそ横の連携が必要なのです。共通の素材、本当は、クラスター化というのは、科目間の連携を強化するか、科目をドッキングするかっていう方法、いずれかを取っていくという申請書を出したのですが、それが大変高く評価された。なぜかという、審査員がよく読んでみると、自分の大学の現状も同じだと思われたのです。10科目も取って、単位の実質化が出来るのかという問題に直面していたわけです。学生たちをどうアクティブに学習に参加させるか、それと学生達をどうエンカレッジするのか、或いは添削して教員とのインターアクションを増やしていくのか。それに加え学生達に自分の成長を自覚させる。自己効力化を高めるという事で、我々もともすれば人を評価するのが好きですが、評価されるのは嫌いだというのが、我々の人種には多いわけですが、学生達からみれば、評価されっぱなしです。ずっと君は出来ないと言われるよりは、出来る、これが出来るようになっていると肯定的に指摘される事は喜ぶわけで、それが次への原動力になる。という事だろうと思うのです。次お願いします

#### 4 学習成果をどう評価するか

いよいよ評価の話でございます。評価の話にきて、まだここまでしか行ってないと、時間通り行ってないのですが、ちょっとペースを上げて行きます。宜しく申し上げます。

評価についての混同というのがありまして、4種類の評価についての混同が、日本の大学では起こっています。1つ目は学生個人としての評価とプログラム評価の混同、それと単独プログラム評価とプログラム群評価がごちゃまぜになっていて、プロセス評価、途中段階での形成的な評価と、最終的な総括的成果をするのもごちゃまぜになっていますし、ベストの評価方法があるのかどうかという事態も混乱している。次行きます、お願いします。

それでは個人としての評価、通常個人として、学生はある教育活動を履修します。もし成果が期待以下であったとすれば、みんなどうするか、フォーカスを転換してこれは学生が勉強しなかつ

たと、我々は考えます。ところが、学生たちは同時に複数の科目を取ります。もし成果が期待以下であったとすると、これ授業評価ですね。私の授業のどこが悪かったのだろうと考えます。これがプログラム評価です。本当のプログラム評価、プログラム群評価といってもいいですが、学生達は実は複数の科目を同時に取っています。それらが相互に関係をして、それらのもし、成果以下であったとするならば、その学科の教育、コースの教育はうまく行かなかったとしたら、全部を見直さなければいけない。フォーカスの転換というところですよ。ところがいままで日本の大学が評価で行っているのは、私の授業のどこが悪かったかというところに行くわけですね。科目間の関係性を殆んど考慮しないという事です。次お願いします。

これは初年次教育で私が大変世話になった Randy Swing が教えてくれたのですが、このように学生の期待によって、学生は色々な授業を取っていくのですが、学生達はコースの内容だけじゃなくて、学生がどの程度参画できるかとか、学生に教室外でグループワークやらせようと思うと、どんな環境が必要なのかとか、コース提供がどのような条件で行われているかとか、順番とか要件を担っているのかといった事の総合作用でアウトカムが決まってくる。そういうプロセスの部分が殆んど見られてこないで、自分の科目の事だけ反省したところで、教育効果は上がらないということでもあります。次お願いします。

出口管理に対する動きというのは皆様方も、大変気にされていると思います。1つは卒業判定試験、外部アセスメント・テスト、ピュア・レビューによる質保証、こういうのが俗に今言われているアウトカム評価の流れです。何故そうなっているかという、大学の枠を超えて国家による資格枠組の整理とか民間企業機関等による卒業認定試験などもそうした動きの1つだといえるでしょう。認定試験と言いますけど、こういう評価の導入を指摘する声も出てきているわけです。これは教員にとってみれば恐ろしい事かもしれないのですが、そうした動きとどう付き合っていくのかという事を考えて見たいと思います。

これは私の中教審の中で数少なく残っている役割なのですが、AHELO という名前を聞

かれた事ございますか。アヘロ、もしくはアヒールともいいますが、Assessment for Higher Education Learning Outcome についての標準化したテストが作れるかどうかのフィジビリティ・スタディについて、日本の方針を決める委員会の委員をやっております、OECD が PISA の大学版をやろうというので、日本も参加しております、フィジビリティ・スタディを行ってそうしたテストが実現可能かどうかという事を検討しており、すでに試行問題の作成事業者を国際入札で選定する段階まで動いています。内容は、一般的な技能、ジェネリックスキルですね、それに専門的な分野で、工学と経済学が、具体的に対象になっています。日本は工学のフィジビリティ・スタディに参加することを決めており、東工大が委託事業で受ける形で10数大学がメンバーとして試行問題の作成にも参加し、試験を受けてみることもなっています。経済学の試行試験には日本は参加しません。ジェネリックスキルはお隣の韓国が手を上げてやっています。2010年末に実現可能性の結論出す予定でしたが約1年は遅れていますので、11年末になります。

アメリカの場合はここにありますが、CLA (Collegiate Learning Assessment) とか

MAPP (Measure of Academic Proficiency and Progress)、CAAP (Collegiate Assessment of Academic Proficiency)、というテストすであるのです。ちなみにOECDのフィジビリティでジェネリックな一般的技能の内容は、CLAがベースになりそうです。批判的な思考力、分析力が主な内容です。私は批判的思考力というものについて、日本が参加すると惨たんたる結果になるとほぼ確信していますが、この要素が入ってくる可能性があります。他にはリーディング、ライティングとか、こういうものがアメリカの大学共通です。つまり大学教育の共通するアウトカムをこういうテストで、入学時と卒業時の差を伸び代として考えて評価すると言う、アプローチがあるのです。

他方、もうちょっと間接的にピア・レビューという形でそれぞれの機関とその教育活動を尊重する形で評価していくというアプローチもあります。イギリスとかオーストラリアでは Audit

といいますけど、こういう機関審査ですとか、イギリスの中で取組まれている方法でエクスターナル エグザミナーといって、教育と評価について外部評価委員が具体的な評価の在り方について詳細にチェックをする仕組みもあります。かなり長期に渡って、同分野の他大学教員から選ばれた評価者がその大学と対応する形でやっていきます。外部専門職団体・政府機関による外部評価と学協会がやるピア・レビューという形、こういう事によって質保証と行っていこうという考え方は、その大学のやり方が機能しているのかという仕組みに注目をするもので、先程のテストとはかなり対極にあります。こういうアプローチもあります。

日本の場合はどうなっているかということ、日本は伝統的には事前規制をやってきたわけです。設置審査で質保証はすんできたと考えられてきた。それが規制緩和によって事後規制も必要であるというように変わってきて、認証評価も導入した上に、学術会議に分野別のガイドラインの検討を依頼しています。ご案内の通り、イギリスのサブジェクトベンチマークというのが、モデルになっています。だけどこれを教えなければいけないという一本化にはならないと思います。ガイドラインは出しますけれども、最終的には日本の場合、それぞれの大学がある程度、それを参考に自分達できちんと目標とか、基準を設定していくという方向に行くのだらうと思います。

アウトカム評価と教育力ということにして参りました話を少しまとめたいと思うのですが、アウトカム評価というのは突然行えるものではないです。先程言いましたように、プロセスを管理していないと、何の効果かまず分からないという事と、結果が出てしまってからでは遅過ぎるという事でもありますね。そういう事から考えるとプロセス評価、途中段階でのチェックをきちんとしていかなければいけない。途中段階でのチェックはなぜ可能かということ、目標と基準があるからプロセス管理ができる。教育力ということについて、特に申し上げたいのは、国立大学にFD呼ばれますと大体出席率が悪い。私が過去4年で一番出席率が良かったのは、山梨大学で35%位、これに学生も入れてやっていたというのが過去最高の

できですね。大きい大学では、教育力で定評があると言われる大学行っても、ひどいところで1桁%。平均的に10%~20%も居たら御の字という事が多いのですが、教育力は方向性がまちまちの状態のまま向上するのでしょうか。私は君達学生の自主性を尊重します。君達の評価の方が正しいというのでしょうか、答案を自己評価させその理由まで書かせ、その通りの成績をくださる、というような先生が私の習った先生の中におられました。教育心理学がご専門でした。そういう先生と、課題を一杯やらせてそれができなかったら単位は出さない、という先生がいて、どちらの先生も教育熱心なのですね。両方の先生居たらどうか。学生から見ると、見解の不一致というか、方向性の不一致に見えるでしょう。それではうまくいかないと思うわけですね。教育力というのはある意味で学習成果の上がる教育プログラム群への評価だと考えて頂いたほうがいい。目標、評価プラン、教育内容・方法、教員の育成・研修といったものを組織的に、戦略的に、いわゆるPDCAのサイクルで進めていくことが、特に執行部の先生方の役割になっていくのだらうと思うのです。こういう事をして行かなければいけない、ちなみに文科省が今非常に興味を持っているのは、IRですね。ご承知かと思いますが、機関別にきちんとデータベース化した情報に基づいて、ベンチマークの対象となる他大学と比較可能な状態で、情報収集して分析して戦略策定に役立てるという方式です。やり方間違うと、中央統制される形になるので、認証評価の基準がIRのデータベースの項目に一致するとそういう危機が訪れるのですね。自分の大学のための改善という要素がないと困るのですけども、しかし、今後情報公開であるとか、認証評価のために、こうした情報を収集してストックする事を、強く求められてくるようになるのですけれど、最大の目的は組織としての大学の現状と課題を理解することであるとか、戦略や運営改善に繋がる研究であるとか、これは大学教育センターとか評価室とかそういう部局が担われるようになるのだと思うのですけども、こういう役割のウエイトが非常に高くなる状況です。そうした仕組みで評価を上げようと思うと、今までお話をしてきたように、ちゃんと

評価の前提である到達目標をはっきりと作って  
いけるかという事が重要であります。

## 5 学士課程教育の構築を何から始めるか

それでは何から改善を始めるかというので  
しょう。詳しくは見ていただいたら分かるのですが、  
昨年、我々の研究グループが文科省の委託事業の  
一環で学部長、学長調査を行ったのですが、文科  
省の名前を出すと回収率が結構良かったのです  
が、簡単に言えばこういう問題設定をしたので  
すね。ラーニング・アウトカムズっていうのは専門  
分野の特性によって、プロセスやアウトプットに  
影響するのだけれども、質保証としての出口管理  
が、どういう形で現在機能しているのかという事  
を明らかにしようとした。分野別に少し見て行  
こうと思います。これをみますと、アウトカムズ  
として縦に色々な項目、こういうものが調査で聞  
いた質保証のやり方なのですが、なんと結果をみ  
ると分野別に全然違うのです。ですから、琉球大  
学として評価の方向性はあるのでしょうか、実  
は質保証の仕組みは医・歯・薬系などには非常に  
特徴があるのですね。例えばテストによって出口  
保証、医・歯・薬系では普通にやってらっしゃ  
るところがですね、人社系では、どういう事を質  
保証としてやっているかという、卒論がもう殆ん  
どすべてです。医・歯・薬系も卒論がある大学  
もあるのですが少ない、教育とか、理学とか工  
学とか、殆どの分野では卒業研究を重視してい  
る。このやり方で質保証するという傾向が強い。  
ところが、社会科学系は60%と少ないうえに、  
口頭試問というのが少なく、客観性の殆んど  
ない質保証しか出来てない、という事があり  
ました。我々はおそらくこれから大きな差が  
付くのは、分野による差ではないのか、特に  
人社系の評価はかなり客観性の担保という点  
では、弱いという事ははっきりしています。

先程言った方法を見ると、医・歯・薬系の  
学部長達はですね、やっぱり複数の質保証の  
方法を並行して取っています。理学、工学、  
俗にいう理系の特徴といってもいいのです  
けど、文系はあまり、ラーニング・アウト  
カムズに対する関心が低く遅れているとい  
う傾向が見受けられます。この事業

の要約として文科省に出した結果ですが、  
ラーニング・アウトカムズの違っているのは、  
実はディシプリンの特性に非常に影響を受  
ける部分があるので、最終的に評価をして  
いく時に、全ての学部・学科を同じ方法  
でアウトカム評価が出来るかどうかは難  
しいということなのです。仮に、揃えよ  
うと思うのであれば、現段階で差がある  
事を踏まえて、それぞれの学部が計画を  
進めて行かないと、難しいだろうと思  
います。大学改革の先行事例として、  
金沢工業はとよく知られているので  
すけれども、ここがやはりすごいと思  
うのは教育目標です。きちんと建学理  
念に沿っています。行動規範の設定も  
あり、学生の行動規範までも制定して  
います。それと到達目標は、社会に適  
応できる力の設定です。それと問題解  
決型学習を標榜して、ルーブリック、  
ここではCLIPというのですがそれを  
すでに導入しています。学習時間の実  
質化、達成度評価ポートフォリオ、  
そういうものが1つ1つ構造的に繋が  
っているという形です。次お願いします。

これが学生の目標です。シラバスはど  
の大学もあるのですが、どんなところが  
違うのでしょうか、1番から4番は大  
体普通のシラバス、5番目は達成する  
べき行動目標、達成度基準、これは後  
程聞いて頂きます。評価の要点、こ  
れは具体的なもので、透明性があ  
って、全評価の40%以内が、達成  
度確認試験です。試験による評価は  
40%以内、それでプロセス重視とい  
うやり方のシラバスで教育が行われ  
ているということです。次お願いします。

これがルーブリックの1つのサンプル  
です。この授業では、これが到達目  
標、ジェネリックについての到達目  
標ですね。それをどういうふうに、  
どこで評価するのか、評価手段と組  
み合わせている、だから知識を取り  
組む力は全体の配点でいうと、10  
点だというようにみてください。試  
験で見ると10点。小テストで10  
点。どこでどういう形でこの力を測  
定するかという事が組み込まれて  
いるわけです。次お願いします。

時間もそろそろ喋り初めて1時間  
近く経っておりますので、まとめさ  
せて頂くとすると、教育力の向上  
っていうのは、基本は学生個人が何  
を出来るようになって行くのかとい  
うことです。しか

し、学生個人といっても、プログラム評価と組織評価が求められているので、こういう認識も満たして頂かなければいけない、先生方の自主性にお任せするのはいいのですが、方向は大学が目指す目標に向いているというようにしていただかないと、アウトカムは同じ方向に向いてくれないということです。勿論、先生方の味が皆同じになるという事ではないですが、今求められている、大学としての教育の成果という形になると、学生達全体が最大公約数、予め、標榜していた目標が達成出来ているかどうかが大変ですから、そうなる、それにあっているかどうか重要です。それと、教育プログラムというのは、1つ優れた科目があっても駄目なので、構造化と他の科目と連携が取れているのか、3点目は目標に向かって必要且つ効果的な、内容・方法が選択されているのか。つまり、いい方法であっても、琉球大学の教育学部にあわない方法がありますが、それが医学部に持って行くと、或は農学部に持って行くと、効果的であるという方法もある。そこは皆さん方が個性を発揮される余地が十分に残っております。それと、教育プロセスにおけるモニタリングやフィードバック、モニタリングと言うのは学生がほんとに予定通り動いているのか、ちゃんと追跡しておかなければいけないという事と、学生達に対してのフィードバックどこまでやれるかが重要です。これまで大学の教員はフィードバックをあまりやってこなかったのは、時間がないのと、方法を知らないという理由なのです。時間がないというのは言い訳になってしまうのですが、方法というのはどういう事かという、評価基準が明確であれば、君はこの部分は出来ているのだけでも、ここの部分が出来てないから、この評価なのだよという事をコメントして、文章をすべて直してやることだけがフィードバックではないですね。或いは感想だけ書いてやるのではなくて、何がいいからこの評価なのかという事を、学生達に知らしめる事がフィードバックであるわけですね。後は評価について先程見ていただいて一番お分かりだと思うのですが、多元的な評価が組み込まれているか、こういう所がポイントになるのではないかと思います。

アクティブラーナーについては、大体書いてあ

る通りでございまして、今までのおさらいでございますので、もう一度、皆様方お目通していただければ、さっきのスライドと重複しておりますので、大体時間になりましたので、これで早口でございましたが、私の皆様方へのお話、終えさせていただきたいと思っております。御静聴有難うございました。